

と未逆と已謗と未謗と。師を論ずれば凡師と聖師と二乗と菩薩と他方と此土と迹化と本化となり。故に四依の菩薩等滅後に出現し、仏の付属に随いて妄りに經法を演説したまわず。所詮無智の者未だ大法を謗ぜざるには忽ちに大法を与えざれ。悪人爲る上已に実大を謗する者には強いて之を説くべし。法華經第二の卷に仏舍利弗に対して云く、「無智の人の中にして此の經を説くこと莫れ」。又第四の卷に藥王菩薩等の八万の大士に告げたまわく、「此の經は是れ諸仏の秘要の藏なり。分布して妄りに人に授与すべからず」等云云。文の心は無智の者の而も未だ正法を謗ぜざるには、左右無く此の經を説くこと莫れ。法華經第七の卷不輕品に云く、「乃至遠く四衆を見ても、亦復故らに往いて」等云云。又云く、「四衆の中に瞋恚を生じて心不淨なる者あり、悪口罵詈して言わく、是の無智の比丘、何れの所より來つて」等云云。又云く、「或は杖木・瓦石を以て之を打擲す」等云云。第二・第四の卷の經文と第七の卷の經文とは天地水火せり。

問うて曰く、一經二説何れの義に就きて此の經を弘通すべき。答えて云く、私に會通すべからず。靈山の聽衆爲る天台大師並に妙樂大師等、処々に多くの積有り。先ず一兩の文を出さん。文句の十に云く、「問うて曰く、釈迦は出世して蜘蛛して説かず。今は此れ何の意ぞ。造次にして説くは何ぞや。答えて曰く、本已に善有るには釈迦小を以て之を將護し、本未だ善有らざるには不輕大を以て之を強毒す」等云云。積の心は寂滅・鹿野・大宝・白路等の前四味の小大・権実の諸經、四教・八教の所被の機縁、彼等の過去を尋ね見れば、久遠・大通の時に於て純円の種を下せしも、諸衆一乘經を謗せしかば三五の塵

点を經歴す。然りと雖も下せし所の下種純熟の故に時至りて自ら繫珠を顕す。但四十余年の間、過去に  
 已に結縁の者も猶謗の義有るべきの故に、且く権・小の諸經を演説して根機を練らしむ。問うて曰く、  
 華嚴の時の別円の大菩薩、乃至、觀經等の諸の凡夫の得道は如何。答えて曰く、彼等の衆は時を以て之  
 を論ずれば其の經の得道に似たれども、実を以て之を勘うるに三五下種の輩なり。問うて曰く、其の証  
 拠如何。答えて曰く、法華經第五の卷涌出品に云く、「是の諸の衆生は世々より已來我が化を成就せり、  
 乃至、此の諸の衆生は始め我が身を見我が所説を聞き、即ち皆信受して如来の慧に入りき」等云云。天台  
 釈して云く、「衆生久遠」等云云。妙樂大師の云く、「脱は現に在りと雖も具に本種を騰ぐ」。又云く、「故  
 に知りぬ、今日の逗会は昔成就するの機に赴く」等云云。經釈顯然の上は私の料簡を待たず。例せば王  
 女と下女と天子の種子を下さざれば国主と為らざるが如し。問うて曰く、大日經等の得道の者は如何。  
 答えて曰く、種々の異義有りと雖も繁きが故に之を載せず。但所詮彼々の經々に種熟脱を説かざれば還  
 りて灰断に同じ。化に始終無きの經なり。而るに真言師等の談ずる即身成仏は、譬えば窮人の妄りに  
 帝王と号して自ら誅滅を取るが如し。王莽・趙高の輩外に求むべからず。今の真言家なり。  
 此等に因りて論ぜば、仏の滅後に於て三時有り。正像二千年には猶下種の者有り。例せば在世の四十  
 余年の如し。機根を知らずんば左右無く実經を与うべからず。今は既に末法に入りて在世の結縁の者は  
 漸々に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ。彼の不輕菩薩末世に出現して毒鼓を撃たしむるの時なり。而  
 るに今時の学者時機に迷惑して、或は小乘を弘通し、或は權大乘を授与し、或は一乘を演説すれども題